

# 雨乞踊唄の一句をめぐって

— 杉の木蔭で月みればしばし陰りて雨が降る —

吉 川 寿 洋

さきに『橋の下の菖蒲』について<sup>1)</sup>という題で、鬼定め唄に関するささやかな考察を試みたことがあるが、その際、何故この唄の中に菖蒲が歌われねばならないのか、その必然性を十分つきとめることが出来ないままに終った。だが、それは鬼定め唄であるからこそ歌い込まれたのであり、菖蒲が「長剣状葉」(近藤喜博著『稱荷信仰』増新書)であることを関係づけて考えることによって、かなり、いい結果に到達出来るやに現在では思っている。そして、このことについて考えて行く過程で、鬼と菖蒲が緊密に結びつくに到る

までには、常民が長い間にわたって、共同体験を積み重ねて来る必要があったであろうとの予測を得た。その結果、この予測がどの程度に有効でありうるかを検証してみるためにも、他の素材で、それを試みてみることを思いついたわけで、ここに、たまたま、紀州仁義荘引尾村立神社の雨乞唄にあらわれる「杉の木蔭で月みれば」云々の一句について、杉の木蔭で月を見ると、どうして雨が降るのか、その疑問に対してどこまで肉迫出来るか、かなり危険な試みを敢えてなそうということになつたわけである。ただ、うまくないのは、

仁義の近くの大窪というところで行なわれている大窪笠踊の「雨乞踊御歌」では、「とちのこかげで月見れば、しばし曇りて雨が降る」(『下津町史』)となつてゐることである。これによると、必ずしも、

杉の木蔭でなくていいわけで、社前の大杉のぐるりを廻りながら雨乞踊をするから、一方は杉の木蔭となり、橡の木**の**ばあいは、橡の木蔭となるだけのことだという説明で、結構こと足りることになりかねないのである。『閑吟集』のばあいなら、「松の葉越しから出る月見れば」であつて、このばあいは、空は曇るが雨は降らず、月が冴えるので、杉と雨との必然的關係を説こうとする者にとつては、むしろ、好都合ということになるが。

このように不都合と思われる例もないではないが、しかし、にもかかわらず、杉は雨や水と深いところがかかわりあつてゐるのだということを、「験の杉」や三輪山伝説などを仲立にして説こうとするのが、この論の目的である。

—

一見きわめて平凡に見える歌句でありながら、常民が意外に大切に伝承し続けて来たのだと思われるものがある。例えば、紀州日高郡中津村の田植唄に、

南の国からやつて来たつばめ何をみやけに持つて来た 柀とに斗と搔かをそえてお米をたんと持つて来た

というのがあるが、この唄は、日高郡の北に隣接する有田郡の清水

町粟生においても田植唄として歌われていて、「ときわの国からつばくろ鳥」が「かねの枘に斗掻をそえてお米をたんと持つて来た」となっている。東牟婁郡でも同様で、つばめが枘に斗掻を添えて持つて来たと歌われる。なお、この唄は、『東石見田唄集』（爐邊歌喜）や撰州三島郡本町の水無瀬神宮において正月三日に行なわれる「松囃」では、つばめがうぐいすにかわり、『田植草紙』昼歌四番では、ほととぎすにかわるが、枘に斗掻を添えて、俵や米を持つて来るところには、全く変化がない。このように動かない部分には、それなりの意味があるので、農耕における予祝儀礼としての役割をはたしているものと考えられる。八十八歳の米寿の祝いに斗掻をきつて近所に配るといことがらも、このような予祝儀礼に充したものであって、米の豊作を願う気持と枘や斗掻が密接に結びついていたことが分る。

「橋の下の菖蒲」の唄にしても、その意味内容には、すこぶる理解困難な部分を多く含んでいるが、てまり唄と化した今も、草履蹴りの唄であった当時のおもかけを伝えていて、「笠着て笠着て」やつて来る一本足の遠来の神、田の神のスタイルを記憶にとどめ忘れることのなかった者が、けんけん跳びをしながら草履を蹴つて、鬼を決める所作に、田の神のスタイルを思い描き、復活させたものであるとうと考えられる。『尾張童遊集』では、「みのきて笠きて誰が鬼じや」と続いているところを見ると、「笠着て笠着て通る處をほいよほいよ」との「ほいよほいよ」の部分は、多分は「鬼よ鬼よ」の転化した形であろう。このように、草履蹴りの唄の中で、鬼としてとらえられている田の神と菖蒲とは、一体どのようにかわつて来る

のであろうか。四国新居浜などでは、苗代の水の取り入れ口に焼米とともに菖蒲をさして供える行事が行なわれているが、これは明らかに田の神をまつる儀礼であり、豊作を田の神に祈願したものである。稲と共通する長剣状葉をもつ菖蒲を用いての予祝儀礼とみなされるものであって、逆に、この種の儀式の模様を草履蹴りの唄は摂取してなつたと考えられる。

## 二

『紀伊名所図会』にみえる「杉の木蔭に月みれば、しばし陰りて雨が降る」の一句を含む雨乞踊唄は、仁義荘引尾村（現海草郡下津町）に鎮座する立神社において、この社の例祭および早魃の折に、四村の氏が、社前に集まって、そこにある大杉のまわりを廻りながら、雨乞踊を行なう際に歌われているものである。立神社は上賀茂神を勧請してなつた古社で、社のかたわらに奇巖が並びたつている有様をさして立神と呼ぶようになったという。又、この社の近くに加茂神社もあり、この方は下賀茂神をまつる。このあたり一帯の呼称加茂谷は、加茂神社の名より起つたといわれる。

同じ下津町の大窪には、木村神社があり、笠踊が保存されていて、「大窪笠踊」と呼びならわされている。この笠踊も又雨乞踊で、早魃の時に、神官が七日間にわたつて精進潔斎して祈願を込め、その満願の日に氏神の境内で踊られたものである。装束は、ゆかたに角帯、草履ばきで、頭にかぶる檜笠には、雨と水の文字が書かれていて、赤、白、青の垂をたらず。手にする扇にも雨と水の二文字が書かれていて、形式は、御祈禱から始まり、入葉踊で氏神境内に踊り

込み、ついで新発意の口上があつて、にわか踊、絵島踊、かやや踊の順に行なわれる。

この笠踊は、「空な七夕をいとしや、川を隔ててこいをめす。とちのこかげで月見れば、しばし曇りて雨がふる。東御山にきりふりて、神の御利生の雨が降る」(傍点筆者)と歌い起される。

これら二つの雨乞踊を比較してみるかぎり、一方の社には大杉が、他方の社には橡の木が、その境内に植えてあることによつて、「杉の木蔭で」となり、又、「とちのこかげで」となつたと考えるのが、ごく普通な解釈の仕方である。だが、そのような解釈が常民に満足感を与えうるものであつたらうかというのが、この論をものするにいたつた、そもそもの発端である。

立神社の雨乞踊は、花笠をかぶり、手に「雨」とか「雨水」とか書いた扇を持って、神社境内の大杉のまわりを巡りながら踊るものであることは、「名所図会」の絵図によつて、うかがい知ることが出来るし、大窪の笠踊も又同様のものであることは実見するところである。おそらくは、「杉の木蔭で」の影響のもと、「とちのこかげで」なる歌句が案出されたのであろうが、「杉の木蔭で」月を見たとき、常民は、その内面において、いかなることを意識したであろうか。いな、一体、何を意識下に感じ続けていたのであろうか。

彼等が、大杉をながめることによつて、「古事記」崇神記にあらわれる三輪山伝説や、古今集卷十八雑下九八二「わがいはほはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど」の歌を直接に連想しえたであらうとは考えることが出来ない。しかし、彼等常民の記憶の底に、ある種の動揺が起りえなかつたとはまでは、断言出来まい。

杉は地深く根をはる植物ではなく、地表近く根をはる樹木であつて、したがつて風にきわめて弱いことや水分を豊かに欲する植物であることは、常民一般の経験的に認識するところであつた。事実、杉と水との関係は密接で、例えば、遠山宮太郎著「杉のきた道」(中公新書)には、「神木などで保護されてきたスギの老木の根元から湧水する場合がある」ことが指摘されており、佐渡国中平野の金井町平清水のムカデスギがそれであり、島根県蔵木村の一本杉も湧水源をなしていると報告されている。

かかる経験的知識の蓄積と同時に、常民は水と杉と三輪明神の織りなす知的伝統を、その記憶の淵の奥深くに沈めて息づいていたと考えられる。「枕草子」の「社は」の段は、「社は、布留の社、生田の社、旅の御社、花ふちの社、杉の御社は、しるしやあらんとをかし」と続いていて、「杉の御社は、しるしやあらん」の部分は、「貫之集」の「いにしへの事ならずして三輪の山見ゆるしるしは杉にぞありける」や、既出の古今集、卷十八雑下、読人知らずの歌が影響しているとするのが一般の説であるが、清少納言は、このように和歌的伝統の世界を生きて、三輪の社とするしの杉とを意識していたのである。かかる意識は、『蜻蛉日記』の天禄三年(九七二年)四月の条に見える、道綱が懸想した相手の女「大和だつ人」の返歌「三輪の山待ち見ることのゆゆしきに杉立てりともえこそ知らせね」や、弘安十年(一二八七年)十月十日頃に初瀬詣をした折のことを記す「中務内侍日記」中の歌にも生きていて、一つ一つ数えあげて行くとなると、大変な労力を必要とする。それほど多数を数えるのである。「後拾遺集」には、素意法師の「古里の三輪の山辺を

「尋ぬれど杉まの月の影だにもなし」という歌があり、後鳥羽院御集や十市遺忠百五十番自歌合にも、それぞれ「三輪の山杉の木がくれゆく月に涼しく名のる時鳥かな」や「三輪の山人に知られぬ雪かとも杉の木の間のみつる月かな」などの三輪の山と杉と月を素材にしたものがある。

この知的伝統は、和歌的世界を中心に大きな拡がりを見せ、世阿弥作と伝えられる謡曲「三輪」にも、それが生かされていることは周知のとおりである。

### 三

ここで特にとりあげてみたいのは、中世の古今集注釈のことである。「頭註密勘」や「古今広貞注」には、三輪山伝説に言及するところが、なかなか興味深いものがある。「頭註密勘」は、承久三年（一二二二年）三月二十一日に成ったもので、三卷八冊、同書の五には、古今集、卷十五恋五、七八〇伊勢の歌「三輪の山いかに待ちみむ年ふとも尋ぬる人もあらじと思へば」について、次のような注釈を加えている。「此集の哥云我庵は三輪の山本恋しくはとぶらひきませ杉立てる門、是を本歌にてよめる也、おほよそ三輪の山を尋ね又しるしの杉をよむ事此哥よりおこれり、その根源は或書云、昔伊勢国奄藝アヱキの郡に侍ける人深山山に入て鹿を待けるほどに、風吹雨降りしきたゞならずして来物あり、形くろくして長高し、目はてれるほしのごとくしていなづまの光に似たり、獮師これを射あてつ、血のあとにつきてたづねいたる、遙なる山中にすこしはなれて野中に塚あり、其中にいれり、其塚のまへに神女ありて、此獮師をま

ねく、すなはち弓に箭をはけてすゝみよる、神女おそるゝけしきなくていはく、汝が射たりつる物は此塚にすむ鬼也、我此鬼にとられて年来此塚にすめり、汝此鬼を射ころすべしといへり、此にしばをかりてその塚の口に入て火を付てやきころしつ、その後此神女を具して家に帰りて又相住事三年になるにうれし富さかへぬ、兎一人をうましめたり、其時此おとこ白地にあるきけり、そのまに此女うせぬ、帰来て見るに女はなくて兎一人あり、泣かなしむで尋ねゆけど行方しらず、しばらくありて此兎又失ぬ、いよいよかなしむに此女の常にあたりける所をみるに、三輪の山もと杉たてるかどとかき付たり、是によりて大和国に尋いりて三輪の明神の社に参て此女にあふべきよしを祈申程に、其社の御戸をしひらきて見え給、見も同見ゆ、此男の心ざしの切なる事を見てともにちかひて神になれりとみえたり、此によりて其神の祭をば伊勢国あふぎの郡の人のをこなふ也、それよりしるしの杉とは云なるべし、謔云鬼に神とらるゝとは是也」が、それである。「古今広貞注」の方は、古今集、卷二春下、九四紀貫之「三輪山をしかもかくすか春霞人に知られぬ花やさくらん」にほどこされた注釈であつて、ここでも三輪山伝説のことが紹介されている。頭陀や大江広貞は、一首の和歌の背景にあるものを、このように想起することによつて、和歌の世界にある種の豊かさや拡がりを与えたのである。彼等は、伝承世界と交渉をもつことから、かかる解釈を生み出したのであつて、それは一種の豊かさを獲得したことにならう。さらに、これらの古今注にあらわれる三輪明神の姿は、当時の人々の三輪の神の正体についての解釈の種々相を示してくれていて、興味深い。その正体は光るものであり、鬼、

大蛇であるとの解釈を示してくれている。又、他書によれば、それは雷なりとある。それが、さらに、三輪族の氏族神、国家神となつて生長をとけて行くのであるが、そのことはさておき、蛇体としての三輪の神が、水神として把握されて行くことは、ことわるまでもないが、すでに「古事記」中巻に、三島の漣咋の女、勢夜陀多良比売をめでて、丹塗矢になつて「その大便まる溝より、流れ下りて、その美人の富登を突きき」という叙述に端を発して、「延喜式」の臨時祭式にも、「祈雨神祭八十五座」中の一座に「大神社」が入っていることによつても明らかである。

ここで、崇神記所載の三輪山伝説のあとに続く細注に少しく触れておきたい。「此意富多多泥古命者神君、鴨君之祖」というのが、その細注の全てであるが、賀茂氏が三輪氏と同じくオオタタネコの子孫であると言及しているのである。このことは、仁義荘引尾村の立神社が上賀茂神をまつる社であることを考慮にいれるとき、この雨乞踊唄を生み出した常民の心底に、みずからの氏神社の祭神と先祖を同じくする三輪の神の存在が意識されていなかったとはいえない。立神社は又「紀伊名所図会」によれば、貴船明神をまつるとも伝えており、雨乞踊唄にあらわれる「貴船河」は、このことと関連しているものと見られる。この他「かもの宮居」とか「かもの川瀬」にしても、基本的には、付近の加茂神社や加茂川の流れをさしているものと考えられ、それが見よういかにでは、京都のそれを重ね合わせる中に「杉の木蔭で月みれば、しばし陰りて雨が降る」の一句を置いてみると、立神社境内の杉の大木から三輪の験の杉、三輪

明神、蛇体へとつながりを呼び、そこから、さらに雷神、雨と結ばれて行く連想の輪を一層強固に思うられる。ただ、「杉の木蔭で月みれば」の句が、必ずしも、固定した表現でないことが、この論の弱点であり、この点の補強が望まれるのであるが、少なくとも、常民は、社前の杉の大木を雨を降らす龍神、水神の憑り代として意識していたに違いない。

#### 〔注〕

(1) 堀勝先生追悼論文集「むろの木」所収

(2) きよき水上たづねきて、かもの宮居に参るなり。ちはやふりくるあめのあし、御代もをさまるみつぎもの。たのむしるしを水無月の、空もひとつにあめがした。杉の木蔭で月みれば、しばし陰りて雨がふる。なびく稲葉も色まして、民を恵の神垣や。かもの川瀬の末までも、くみてよろこぶみたらしや。みなかみのおくのゐを、くみてぞながす貴船河、よもにうるほふ雨がふる。照日のどかに雨雲の、八重に霧たついぶき山。

(3) 松の葉越しから出る月見れば、しばし曇りてまた冴える。

(4) 「伴信友全集」第二所収

(5) わらはが住家は三輪の里、山もと近き所なり。その上わが庵は、三輪の山もと恋しくはと詠みたれども、何しにわれをば訪ひ給ふべき。なほも不審に思しめさば、訪ひ来ませ。杉立てる門をしるしにて、恐ね給へといひ捨てて、かき消す如くに失せにけり。

(6)

まだ青柳の糸長く、結ぶや早玉のおのが力にささがにの糸く  
り返し行く程に、この山もとの神垣や杉の下枝に止まりたり。  
こはそもあさましや、契りし人の姿かその糸の三わけ残りし  
より、三輪のしるしの過ぎし世の語るにつけて恥かしや。  
この歌の三輪の山は、大和国にあり、むかし、彼三輪山の麓  
にすみける人の娘のもとに、よなく、いとつくしき男の通  
ひけるが、かよふ事、既に三とせに成にけれども、ひるとま  
る事はおさくせず、あり所もいはざりければ、いとあやし  
くおほつかなくおほえて、はりにしづのをだまきといふもの  
をつけて、それをしるべにしてたづねゆかむと思ひて、しか  
したり。此亭をしるべにしてたづねゆきてみれば、その上の  
山の杉のあまたたてる中へとめて入て、みれば、その杉のあ  
ひだに輪を三つされるより外はかつて物もなし。あやしみて、  
其輪のもとにて此女のいはく「われにかよひたまひし事、さ  
すがに日数ふりぬ。年ごろといふべし。いまで、そのあり  
どころをもしらせたまはず、かたちをもあらはし給はず。か  
くしつなむ、これまでたづねたてまつり来れり。たとひ、  
いかなる鬼神なりとも、さらにうとましとおもひ奉らじ。形  
をあらはして見せたまへ」と云。爰に、大なることにて、「ま  
ことに、汝が云ごとく年ごろになりぬ。我は此所の鎮守神也。  
我あまりにたけたかきゆへに社をもつくらず。たゞ社のよし  
をかたどりて輪を三つする也。是は、われと汝との心、月輪  
をへうする也。汝らをもかねて神になさんがために、かくの  
ごとくまうけにけり。さらば、かたちをあらはして見せむ」

(7)

とて、そのたけ二十丈斗なる鬼にてぞ有ける。女も其時、や  
がて神となれり。かの社のしるしに、この杉をせしかば、杉  
のしるしと云事をよむ也。  
一義云、如此、女のもとへ通ひけり。しかれども、夜ばかり  
きつゝ、ひるはとゞまらざりければ、いぶかしくおほえて、人  
に云ければ、「はりにしづのをだまきをつけて其をしるべと  
してたづねよ」と云々。おしへのごとく、如此してたづねゆ  
きてみれば、はりを蛇の尾にさせり。かるがゆへに身を倣  
してさけぶところへたづねゆきてみれば大蛇の形なり。かの  
亭を□にまくに、みわ有ければ、それよりして彼山を三輪山  
といへりと云々。扱、かの大蛇、神となりて、今の三輪の明  
神是なりと云々。しかあれども、かみの代を本とすべし。此  
歌も、神のすがたをかくして人にしられたまはぬやうに、し  
かのごとく霞のたちかくすは、人知れぬ桜や咲らんとよめり。  
〔片桐洋一著「中世古今集注釈書解題一」赤尾照文堂〕  
全体として、「大神神社史」に負うところが多い。

（和歌山工業高等専門学校助教授）